



Title	第二号発刊に寄せて
Author(s)	佐々木, 倫子
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究. 2006, 2, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25032
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第二号発刊に寄せて

2005年3月に『母語・継承語・バイリンガル教育 (MIB) 研究』の創刊号を刊行してから、はや1年たちました。ここに第2号をお届けできることを大変うれしく思っています。プレ創刊号も合わせますと、MIB研究会の会誌は3号を数えることとなります。

2005年度のMIB研究会の活動ですが、第6回研究集会に当たる、2005年度年次大会を2005年8月5日に開催いたしました。巻末の大会プログラムをご覧いただきたいのですが、国立オリンピック記念青少年総合センターで、「学校教育の中で多言語を育てる」というテーマのもとに行いました。「米国国際学校での継承日本語“シェルター”プログラム」、「公立・私立高校が挑戦したイマージョン英語教育—客観テストと心理評価の結果から—」、「帰国子女が多い環境での日本語・外国語の指導の現状」、「国内国際学校：2言語による読書力査定とその基準—発達段階に合わせたバイリンガル・リテラシー・テストの必要から—」といずれも、意欲的、かつ、先駆的な教育実践に基づいた発表でした。発表内容が充実していただけに、討議時間の足りなさを感じた方も多かったかと思えます。本誌はそのときのいくつかの発表をもとに、他の論考を加えてまとめられたものです。本誌の中核のひとつである、米国ニューヨークにある国連国際学校における継承日本語教育の取り組みに関心を持たれた方は、大山智子氏の解説からお読みいただくと良いかと思えます。大山氏は、自身国連国際学校の卒業生であり、高度なバイリンガル能力を備えた人物です。無論、氏の筆力は個人の資質・能力に帰するところ大ではありますが、同時に、国連国際学校の継承日本語教育が寄与した部分もある、いや、その部分が大きいと思いたいところです。論考に現れた論理性は、学校教育の中で培われた面もかなりあるのではないのでしょうか。先駆的な継承日本語教育を経た氏が、その授業実践を現在どのように捉えているかをお読みいただければと思います。

さて、MHB研究会の2005年度の活動を続けると、年が明けた2006年には、ふたつの研究集会を企画しました。まず、2006年2月18日に名古屋外国語大学において、大学と共催の形で第7回研究集会「ダブルリミテッド/セミリンガル現象を考える」を持ちました。こちらにも巻末のプログラムをご覧いただきたいのですが、まず「セミリンガリズムという用語の歴史的背景」で、時に差別的であると非難される「セミリンガル」という用語とその概念を押さえ、次に、「日本のモノリンガル話者中心の社会における言語障害学の観点から」で学習障害児の観点からの言語発達を考え、さらに、異なる現場からの4つの事例発表が続きました。現場の教員からの質問に対する学習障害児研究者からのコメントは示唆に富んだものでした。最後に、フロアを巻き込んでのパネルディスカッションが持たれました。企画側の予想をはるかに超える多数の、そして、多様な分野からの参加者の姿に、マイノリティの児童生徒の言語発達にどれだけ多くの人々が向き合っているかが感じられました。

さらに、現時点ではまだ実施されていませんが、本年度中に第8回研究集会が開催される予定です。2006年3月4日に桜美林大学新宿キャンパスで開催される、「母語・継承語とその教育的意義」という研究会で、これは、母語・継承語というテーマのもと、2005-6年にまとめられた修士研究の発表を中心とするものです。巻末のプログラムをご覧ください。

子どもたちの言語発達・言語教育は、常に“待ったなし”の状況ですが、世界の交通・通信網の発達はその拍車をかけています。人の流通・情報の流通の活発化は社会のシステム、教育のシステムが追いつかない状況呈しているからです。教育の理念も実践も追いついていない中では、子どもたち、特に、移動せざるを得ない子どもたちの十全な言語発達をきわめて難しい状況に置かれます。このような状況下で、私たちは研究集会を積み重ね、研究会誌の刊行を積み重ねなければいけないと感じています。研究の成果を実社会に還元し、実社会から研究への示唆を得る、この往還を守っていくことが、子どもたちのより良い母語・継承・バイリンガル教育につながると思うからです。今回の編集責任は、MHB研究会の中島和子代表が担当しました。この書が皆様の一助となることを願ってやみません。

「母語・継承語・バイリンガル教育研究会」事務局

佐々木 倫子

2006年2月